

## 「神の子たちと悪魔の子たち」

2018年07月31日

ヨハネの手紙 — 3章4節～10節 罪を犯す者は皆、法にも背くのです。罪とは、法に背くことです。あなたがたも知っているように、御子は罪を除くために現れました。御子には罪がありません。御子の内にいつもいる人は皆、罪を犯しません。罪を犯す者は皆、御子を見たこともなく、知ってもいません。子たちよ、だれにも惑わされないようにしなさい。義を行う者は、御子と同じように、正しい人です。罪を犯す者は悪魔に属します。悪魔は初めから罪を犯しているからです。悪魔の働きを滅ぼすためにこそ、神の子が現れたのです。神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人の内にいつもあるからです。この人は神から生まれたので、罪を犯すことができません。神の子たちと悪魔の子たちの区別は明らかです。正しい生活をしない者は皆、神に属していません。自分の兄弟を愛さない者も同様です。

聖書では、「信仰と不信仰」「正と悪」「義と罪」など、二元論で語られている場合が多い。上記の御言葉でも「神の子たちと悪魔の子たち」と表現されている。私は、この二元論に納得できない。人の心は、一方的な「正」でも「悪」でもなく、両者が複雑に絡み合っていると思うからである。マルコ福音書9章に、主イエスと癲癩の子どもを持つ父親の対話を記している。主イエスは父親に、「このようになったのは、いつごろからか」と尋ねると、父親は、「幼い時からです。霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください」と、癒しを求めた。すると主イエスは、「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる」と言われた。父親はすぐに、「信じます。信仰のないわたしをお助けください(24節)」と叫んだ。父親は、信と不信の狭間を行き来していた。それを指摘され、恐れて、「信じます。信仰のないわたしをお助けください」と叫んだのである。この父親の叫びが私たちの信仰の実際であろう。信の中に不信が巢食い、不信の中に信が宿る。善悪、正邪、信不信に揺れ動く中を、人は皆生きているのではないか。しかし、聖書記者たちは信仰を持って、善を行い、義を生きるように勧めるために、きっぱりした二元論で書いたものと思う。

著者は、罪を犯す者は皆、不法を犯している、罪とは不法のことであり、不法を犯す罪に陥るなと警告している。あなたがたも知っているように、罪のない御子イエスは罪を除くために神から遣わされた。この御子イエスの内にいる者は罪を犯さない。「子たちよ、だれにも惑わされないようにしなさい」と呼びかけ、「義を行う者は、御子と同じように、正しい人です」と諭している。逆に、罪を犯す者は皆、御子イエスを見たことがなく、知らないからである。彼らは悪魔に属し、悪魔は初めから、罪を犯していると、罪と悪魔を同義語としている。悪魔の働きを滅ぼすためにこそ神の子イエスは現れた。神から生まれた人は皆、神の種がその人の内にあるので、罪を犯さない。神の子たちと悪魔の子たちの区別は明瞭である。そして、「正しい生活をしない者は皆、神に属していません。自分の兄弟を愛さない者も同様です」と、神に属していない者は、自分の兄弟を愛しないと、神不在の罪は愛の不在であると言う。

著者は、神の子たちと悪魔の子たちを「義」と「罪」に分け、罪を除くために来られた主イエスを知り、信じて、神の子となり、兄弟たちに対する具体的な愛を生きる者となるように勧めているのである。